

## 【6】満年齢か数え年齢か

[1] 前節までの考察に際して所々に述べたように、釈尊の出家・成道・入滅年齢についての伝承が錯綜する一つの原因は、諸種の文献が年齢を記述する際に「満」と「数え」を必ずしも厳密に使っていないためもあると考えられる。しかし「満年齢」と「数え年齢」では最大2歳の誤差を生じるのであるから、おろそかにはできない。

次号モノグラフに掲載予定の論文「年齢の数え方について」で詳しく考察するけれども、古代インドの年齢の数え方はおおよそ「満年齢」を採用していたと考えられる。したがってここでも原則としては、「満年齢」が採用されていたと考えて差し支えないであろう。

[2] しかしこれは古代インドの風習ということであって、諸種の文献が常に「満年齢」にしたがっていたという保証はない。ましてここでは漢訳文献も用いており、漢訳者が中国の風習にしたがって「数え年齢」に換算したということも十分にありうる。そうとするならば、極端に言えば一つ一つのケースごとに検討が必要ということになる。

必ずしも十分な資料が残されているわけではないが、可能なかぎり考察してみよう。

[3] 分かりやすいのは苦行年数である。【3】の [2-2]、および [5-3] の“Nidānakathā”についてのコメントにふれたように、苦行年数は「満年数」で示せば「6年」、「数え（足掛け）」で示せば「7年」となる。漢巴共通して伝える年数は「6年」であって、これは「満」で示されたものと考えてよい。

[4] また成道の35歳について次のように表現されているものもある。

「今から35年過ぎて仏になられるであろう (esa pañcatim̐sa vassāni atikkamitvā buddho bhavissati.)」 “Nidānakathā” Jātaka vol. I p.055

「過ぎて (atikkamitvā)」は明らかに「満」を表したものであることができるであろう。『法顕・涅槃経』と『普曜経』は成道を36歳とするが、これは「数え」の数字であろう<sup>(1)</sup>。ということになれば成道の「35歳」は「満年齢」ということになる。

(1) 『法顕・涅槃経』は出家を29歳とするから、もし36歳を「数え」と考えるなら、こちらでも「数え」としなければならぬかもしれない。もし29歳が「満」なら36歳も「満」となるが、そうすると苦行は「7年」となる。これも不合理であるから、とりあえず36歳は「数え」であると考えておく。

[5] 苦行年数の6年が「満」であり、成道の35歳が「満」であるとすると、必然的に出家年齢の29歳も「満」と考えてよいであろう。

[6] 問題があるのは入滅年齢である。

[6-1] 先に述べたように、入滅年齢を記述するシーンは(1) 舍利弗・目連の入滅に関連する場面など釈尊の沙羅双樹での入滅に先立つ少なくとも1年8ヶ月、あるいは2年8ヶ月ほど前と、(2) 入滅に先立つ8ヶ月ほど前のヴェーサーリの竹林村での場面と、(3) 沙

羅双樹の下での入滅当日の場面の三つである。

もし(3)が「満80歳」でしかも後述するように入滅が誕生日(出胎日)当日であったとすると、釈尊は「満80歳」になられたその日に入滅されたことになる。とするならば(2)の時点では、「満79歳」であり、(1)の時点では「満78歳」ないしは「満77歳」ということにならなければならない。

しかるに伝えられる資料はすべて「80歳」である。しかも【4】の[4-2]の『涅槃経』の記述に関する表に明らかなように、白法祖と失訳はともに沙羅双樹下での入滅を記す部分の記述で「79歳」とし、これを遡る8ヶ月ほど前の竹林村での雨安居時には「80歳」とする不思議も存する。

[6-2] まず大部分の伝承がその場面に関係なく「80歳」とするのは、釈尊の入滅年齢が「80歳」であるという牢固たる伝承があって、これが固定観念になっていたからであろう。MN.12の‘Mahāsīhānāda-sutta’が舍利弗に対して、「私は年老い、老衰し、高齢で、人生の終わりに達し、齢傾いてすでに80である」という文章は、竹林村での阿難に対する言葉と全く同じであって、定型化がなされているわけである。したがって入滅に関わる事項はすべて「80歳」ということになってしまったのではなからうか。とするならば釈尊の入滅年齢「80歳」は動かず、もし合理的に竹林村などの記述を理解するならば、それは「概数」を掲げたものということになる。『遊行経』が「吾已老矣年粗八十」とし、『白法祖・涅槃経』が「今仏年已尊且八十」とし、『失訳・涅槃経』が「年且八十」と表現することがそれを表すのかもしれない。「粗」は「あらい」「おおまか」「ほぼ」という意であり(諸橋『大漢和辞典』頁9028)、「且」は「おおいさま」を表す場合もあるというから(諸橋『大漢和辞典』頁266)、「80歳にもなってしまった」というようなニュアンスを表すものとも考えられる(1)。もし入滅当日に満80歳になられたとすれば、まだこの時点では80歳になっていないわけであるが、80歳に近い老人が「私ももう80歳だから、身体にガタがきて当然だ」などという表現は自然になされるものであろう(2)。

(1) この部分のパーリ文は‘asitiko me vasso vattati’である。‘asitiko’は‘asiti’に接尾辞の‘-ka’を付したものであるが、これによって「概数」を表すとは必ずしも解釈できない。しかしだからといって、概数でないとも言えないであろう。

(2) 「満」と「数え」の誤差ということも考えられないことはない。後述するように入滅当日=2月15日に満で80歳になられたとすると、この時点では1月1日で始まる「数え」では81歳であり、その8ヶ月前なら80歳であるからである。しかしこの考え方に従うと、舍利弗などとの関連で説かれる80歳が理解しにくくなる。またその場所場所で年齢の数え方が変わるということのも合理的ではなからう。

[6-3] 『白法祖』と『失訳』については意味深長で、竹林村での80歳は「概数」であるかもしれないし、あるいは「数え」であるかもしれない。しかし「79歳」は「概数」とは理解できないし、「数え」で数えて数字が減じるというのも理解しがたい。とするならば「満年齢」である可能性が高いが、何しろ白法祖と失訳の2本だけの特殊説であり、たといそれが客観的事実であったとしても、本研究がパーリと漢訳に共通する資料を第1次水準とし、もし共通しない場合はパーリを優先するという資料観からすればこれを採用することはできない。

[6-4] よって釈尊の入滅年齢は「80歳」とし、これは年齢の数え方の原則と、苦行年

数が満年齢であって、これに基づいて満年齢として計算すると  $29 + 6 + 45$ （成道から入滅までの年数）＝  $80$  となり、合理的な数字となるから「 $80$ 歳」も「満年齢」で表されたものと考えておく。

[7] ただしここでぜひとも紹介しておかなければならない資料がある。それは釈尊の誕生・出家・成道・入滅年齢に関して年代が付された文献である。それらはそれぞれに年代が付されているだけに、どのような基準で年齢が計算されているかが分る。

[7-1] 『ピガンデー氏 緬甸仏伝』<sup>(1)</sup> は釈尊の入胎・出胎・出家・成道・入滅を次のように言う。

入胎＝アニュジャーナ紀元第67年ウッタラサム星宿（ウッタラサム星宿がuttarāṣāḍhaをさすとすれば、アーサール八月の満月の日＝4月15日）

出胎＝68年ヴェーシャーカ星宿の下の金曜日（＝2月15日）

出家＝96年月曜日（南方伝承ではアーサール八月の満月の日＝4月15日）

成道＝103年ヴェーシャーカ星宿の水曜日（＝2月15日）

入滅＝148年カチャン月の満月のヴェーシャーカ星宿の火曜日（＝2月15日）

これに基づいて通常のように、「出胎」を誕生日とする「満年齢」を計算してみると、次のようになる。

出家＝満28歳2月

苦行＝満6年10月

成道＝満29歳0月（すなわち誕生日の当日）

入滅＝満80歳0月（すなわち誕生日の当日）

したがって、出家年齢が29歳という伝承に反することになる。

しかしインドには出胎を誕生日とするのではなく、「入胎」を誕生日とするという伝統も存した。これも次号に掲載予定の論文で詳しく述べるが、この伝統が殺人の「人」は入胎以後の胎児も含むことや、三世両重因果が今世を入胎からとすることに現れているのを勘案すれば納得されうるであろう。

そこで「入胎」を誕生日として満年齢を計算してみると次のようになる。

出家＝満29歳0月（すなわち誕生日の当日）

苦行＝満6年10月

成道＝満35歳10月

入滅＝満80歳10月

これに基づくと、出家「満29歳」、苦行「満6年」「足掛け7年」、成道「満35歳」、出家から入滅まで「満50年余」、成道から入滅まで「満45年」、入滅の少なくとも8ヶ月前のヴェーサーリでの雨安居の時点で「満80歳」、沙羅双樹の入滅当日「満80歳」のすべてが合理的に解釈される。

(1) 赤沼智善訳 無我山房刊 大正03年 pp.407～408

[8] ついでに中国における伝承も検討しておこう。

[8-1] 『歴代三宝紀』<sup>(1)</sup> は年齢の数え方に関係する部分のみを抽出すると次のように

言う。

入胎＝莊王九年癸巳四月八日  
出胎＝十年（甲午）仲春二月八日夜鬼宿合時  
出家＝僖王八年壬子年十九月八日夜半  
成道＝十九年癸亥年三十二月八日明星出時  
入滅＝匡王四年壬子二月十五日後夜

これにしたがって「入胎」からの満年齢は次のようになる。

出胎＝満10ヶ月  
出家＝満19歳0ヶ月（誕生日当日）  
苦行＝10年10ヶ月  
成道＝満29歳10ヶ月  
入滅＝78歳10月7日

「出胎」からの満年齢は

出家＝満18歳2ヶ月  
苦行＝10年10ヶ月  
成道＝満29歳0ヶ月  
入滅＝満78歳0ヶ月7日

となる。

『歴代三宝紀』は19歳出家、30歳成道、79歳入滅説をとっており、これではいずれも入滅が78歳となって合致しないから、「満年齢」をとっていたのではなかろう。「数え」であるとする、入胎からでは出家が20歳となって合致しないから、これは「出胎」からの「数え年齢」によっていたことがわかる。

ただしこの伝承は前述したように『失訳・般泥洹経』によったものと考えられるが、これでは苦行は足掛け「11年」となって、『失訳・般泥洹経』の「12年」とは合致しない。

(1) 大正49 p.023上。( )の中の干支は筆者が補ったもの

[8-2] 『仏祖統紀』<sup>(1)</sup>は次のように言う。

入胎＝（昭王二十五年 癸丑に当たる）以四月八日明星出時降神母胎<sup>(2)</sup>  
出胎＝昭王二十六年甲寅 夫人懷孕將滿十月、……四月八日、日初出時  
出家＝五十年戊寅太子年二十五歳二月七日  
苦行＝六年  
成道＝穆王四年癸未二月八日  
入滅＝五十三年壬申二月十五日

これによって「入胎」からの「満年齢」を計算してみると次のようになる。

出胎＝満1歳0ヶ月（ただし母胎にあったのは10ヶ月とする）<sup>(2)</sup>  
出家＝満24歳10ヶ月  
苦行＝満6年0ヶ月  
成道＝満29歳10ヶ月  
入滅＝満78歳10ヶ月

また「出胎」からの「満年齢」は次のようになる。

出家＝満23歳10ヶ月

苦行＝満6年0ヶ月

成道＝28歳10ヶ月

入滅＝満77歳10ヶ月

『仏祖統紀』は25歳出家、30歳成道、80歳入滅説をとっており、満年齢とすると、入胎からでも、出胎からでもそのすべてに合致しない。したがって「数え年齢」であると考えられるが、その場合は出家・成道は「出胎」を誕生日とするほうに合致するが、それでも入滅は79歳となって合致しない。

(1) 大正49 p.142上

(2) 『仏祖統紀』自身が言うように、これでは12ヶ月間胎内にあったということになって計算が合わない。両土の暦の違いによるものとしている。

[8-3] 以上のように中国では中国の習慣にしたがって、「出胎」からの「数え年齢」が採用されていたように考えられるが、といてすべてが合理的に解釈できるわけではない。また19歳出家説にしる、30歳成道説にしる、原始聖典には伝わらない特殊説なのであるから、本研究の基準としなければならない必然性はない。

[9] 以上のように南方伝承に従うかぎり、少なくとも釈尊の生涯に関する年齢（年数）表現は「満年齢」であって、その数え方は「入胎」からするのが、もっとも合理的であるが、これには誕生日や成道日・入滅日などの月日が関係するから、ひとまずここで切り上げ、最終的結論はこれらを検討した後に下すこととしたい。